

セッション NO.4 : 被災地・避難者受入地の連携を考える ～役場若手職員が本音で語る～

報告者：コンビーナ（福島伸一郎）

平成27年9月20日

1. 目的

近い将来の双葉郡の更なる連携強化を期待し、役場若手職員の本音の意見交換場を設けた。

2. 参加者（計21名）

双葉郡各自治体から30歳前後を中心とした職員各1名～3名（計17名）と事務局等

3. 進行等

各人より、以下の3点につき発言を求めた

- ・日頃の業務において、何を考え、何を思い、何を悩んでいるか？
- ・発災以降今に至るまでの経験を通じて得た教訓は？
- ・県外あるいは国外に向けて、言いたい、伝えたいことは？

4. 発言概要

- 若手職員は悩み深い状況について次のように語った。
 - ・小さな子供を抱える職員にとっては、避難指示解除後に子供を帰すべきか否かで悩んでいる（多数）。
 - ・住民対応では、どこまで支援をすべきか、という判断に悩んでいる（複数）。
 - ・発災後、長期間に亘り住民からの苦情を聞き続けなければいけないのは辛い。自分も被災者の一人であるはずなのに（複数）。
- 職場内では、長距離車通勤をしている人達にはボディーブロー的に辛さが増してきている（複数）。頑張りすぎて精神的に落ち込んでいる若手もいる。
- 県外の人達には、現地を直接見て欲しい（複数）。他方で、引き続き厳しい状況にあることを県外等の方々に伝えるべきではあるが、賠償が欲しいからだと思われてしまう傾向が強いことが分かっているから、心境は複雑だ。
- 災害に対する備えが必要（多数）。他方で、防災計画やマニュアルはいざという時には機能せず、各人の現場での判断力や住民間協力が大事（複数）
- 住民支援については、過度な対応は良くない（複数）。役場が対応出来る範囲を伝え、自ら動いて頂けるようにすることが大事。
- 復興については、少子高齢化という大きな流れも踏まえれば、外からの移住者を増やすべき（複数）。
- 今回の災害は、誰の責任でも無いと言い聞かせつつ日々の仕事に当たっている。

5. 発言に関する印象・感想（コンビーナ）

- 各役場職員にとって、各人が有する多面的な立場（役場職員として、家族の一員として、被災者の一人として）の捉え方が非常に大変だということを痛感した。
- 家族を含めた居住地を確定させた方々は、自身の近未来について、ある程度以上明確な方向が見いだせている。他方で、それが決め切れていない中では、多くの悩みを常に持つことになっている。
- 各自治体の未来については、役場職員以外の方々のアイデアが入ることも非常に大事だ。

6. 反省等（コンビーナ）

今回は、各自治体から2名程度の参加で総勢17名からのおおの意見等を全員が聞くという形式にしたが、3時間の会議で各人の発言の機会は3回程度ずつしか与えることが出来なかった。かつ、参加者間での活発な意見交換が行われるようなことはなく、とりあえず各人からの意見を話して頂くようなことで終始してしまった。

次回は、より本音の議論がなされるよう、

- ・各人からの発言機会を増やすこと、
- ・参加者間での活発な意見交換が行われること、

に配慮した進め方にすべきと感じた。

具体的には、以下を提案したい。

- ・各自治体からの参加人数を1名に限定して全体人数を減らすという考え方もあるが、各自治体からは遠距離を自身で運転して来て頂いており、例えば女性参加者に一人で運転をして来て頂くことなどは不適切であること等を考え各自治体からは2名程度とするのが適当ではなかろうか。
- ・各自治体から2名程度の参加者を募るとして、例えば4つ位のグループに分けて、同じテーマについて30分程度語り合ってもらい、その後にコンビーナが主導して各グループからの発表をして頂くことで、発言機会を格段に増やすことが可能。
- ・グループ分けは、所属する自治体の避難指示に係わるプロセス毎に分けることで、置かれている環境ごとの議論がなされるようにすることも一案。
- ・意見交換を活発化するために、事務局サイドから提示する論点以外に、各グループ内で論点そのものについても議論して貰うことも良いのではなかろうか。
- ・また、可能であればのことであるが、意見交換後に食事を共にする機会が作れると、意見交換会後の連携が図られやすくなるのではなかろうか。

（了）